



Title	高純度硬化性ゲルによる無細胞移植椎間板組織自然再生誘導法の検討 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	辻本, 武尊
Citation	北海道大学. 博士(医学) 甲第13013号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70530
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Note	配架番号 : 2392
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Takeru_Tsujimoto_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士 (医 学) 氏名 辻 本 武 尊

学位論文題名

高純度硬化性ゲルによる無細胞移植椎間板組織自然再生誘導法の検討
(An acellular bioresorbable ultra-purified alginate gel promotes intervertebral disc regeneration via nucleus pulposus progenitor cells)

【背景と目的】椎間板は体幹を支える脊柱の基本構成要素であるが、その変性により椎間板ヘルニアや脊柱管狭窄症、脊柱変形などの多くの脊柱疾患を惹起する。通常は鎮痛剤投与や手術療法が行われるが、対症療法の域を出ていないのが現状である。例えば、椎間板ヘルニアの手術は、脊髄神経を圧迫している脱出髄核を摘出するが、髄核摘出後の椎間板組織は内部が空洞になるため組織再生が進みにくく、椎間板変性を起こしやすい。さらに摘出術後の再発は、術後半年以内に起こることが多く、再発を繰り返す症例では脊椎固定術が必要になることもある。こうした背景から、術後の再発を予防し、椎間板変性を抑制/再生する新規治療法の確立が期待されている。

変性した椎間板組織では髄核内の水分含有量及び細胞外マトリックスが減少する。椎間板の抑制/再生治療戦略では、これらを保持することが必要不可欠であるが、他の多くの組織再生と同様に、椎間板再生でも組織特異的表現型を持った細胞を保持することが非常に困難である。髄核組織はglycosaminoglycans, proteoglycans, type II collagenといった細胞外マトリックスが豊富に存在し、多量の水分を有することで脊柱から伝達される力学負荷を吸収する役割を担っており、細胞密度は極めて低い。さらに、椎間板は無血管野であり周囲からの拡散により栄養状態を維持している特殊な組織であるため、血管を介した間葉系幹細胞の増殖にも適していない。

近年、組織工学的手法による椎間板再生医療が試みられており、アルギン酸による組織再生能を基盤とした椎間板再生研究が散見される。しかしながら、従来の培養用アルギン酸は細胞毒性を有する不純物を多く含有しており、アレルギーともなるため、実臨床での生体内利用には適さなかった。そこで我々は、毒性を従来の1万分の1以下に低減し、組織再生能を有した新規医療用マテリアルとして高純度硬化性アルギン酸ゲル (Ultra-purified alginate gel; UPAL) を開発してきた。

以上より、椎間板内における組織修復環境を最適化し、組織再生が促進されるという仮説のもと、UPAL を使用した椎間板組織自然再生誘導法の効果を検証したのでここに報告する。

【方法と結果】まず *In vitro* 試験として、思春期特発性側弯症手術患者より髄核細胞の供与を受け、市販の細胞培養用ゲル (CAL) および粘調度の異なる2種類のUPAL (AL100, AL500) での細胞生存率の算定を行った。通常培養状態では、いずれの時点でも3群間に有意差はなかったが、血清飢餓条件下ではUPAL内髄核細胞はCAL内髄核細胞に比べて細胞生存率が有意に高かった。粘調度の異なるUPAL間に有意差はなく、臨床上のハンド

リングのしやすさから、粘調度の高いAL500を選択した。次に、生体力学試験としてヒツジ屍体腰椎を用いた静的試験(6方向; 6Nm, 軸圧縮; 1000N), 及び動的軸圧縮試験($\pm 300\text{N}$, 1Hz, 1000回)を行った。静的及び動的試験後ともにUPALが椎間板外へ逸脱せず, UPAL群は椎間板摘出単独群より高い脊柱剛性を示した。加えて, *In vivo* 試験として, ウサギとヒツジを用いた埋植試験を行った。埋植手術後のMRI評価では, 埋植後4, 12, 24週いずれの時点でも, UPAL群は椎間板部分摘出群と比較して椎間板変性が有意に低かった。また病理組織にて, UPAL群は椎間板部分摘出単独群に比べ椎間板変性スコアが有意に低かった。免疫組織学的評価では, UPAL群は椎間板部分摘出単独群に比べType I collagen陽性細胞率が有意に低く, Type II collagen陽性細胞率は有意に高かった。さらに, ISO基準に準拠した生物学的安全性試験としてウサギを用いた埋植試験により全身及び埋植局所への影響を評価した。全身主要臓器及び局所椎間板ともにUPAL埋植後の毒性はなく, その安全性を確認した。最後に, UPAL埋植後ウサギ髓核組織凍結切片を作製し, 髓核前駆細胞のマーカであるGD2及びTie2の二重染色を行った。埋植後2, 4週の時点で, UPAL群は椎間板部分摘出単独群に比べGD2/Tie2二重陽性細胞率が有意に高かった。

【考察】本研究では, まず, ヒト髓核細胞を用いた*in vitro* 椎間板変性モデルにより評価し, UPAL内髓核細胞はCAL内髓核細胞と比較して有意に細胞生存率が高く, アポトーシス細胞率が低かった。次に, ヒツジ屍体腰椎を使用した*in vitro* 生体力学試験を行い, UPALが埋植部位外に逸脱しないことを確認した。さらに, ウサギ及びヒツジモデルを用いて, 本治療法が組織修復を促進し髓核組織の水分含有量を保持することを実証した。さらに, ウサギモデルを用いてISO基準に準拠した生物学的安全性試験を行ない, その安全性を証明した。最後に, ウサギ髓核組織凍結切片を作製し, 髓核前駆細胞陽性率がUPAL埋植により増加することを確認した。以上より, UPALを使用した椎間板組織自然再生誘導法は髓核摘出単独と比較して安全かつ有効な治療法であることが実証された。UPAL群では埋植後2, 4週においてGD2/Tie2二重陽性細胞率が有意に高かった。このことから, 髓核摘出術後に内在性の残余髓核細胞がUPALで充填された創傷治癒部に集積し, 同様に, 術後早期に髓核前駆細胞がUPAL内へ集積, 増加することで椎間板組織が自然再生した可能性が示唆された。

臨床応用を想定した場合, バイオマテリアル単体使用による椎間板再生医療は, 自家細胞移植治療に比べて製品の長期保存が可能であり, 時間的な制約もなく1期的手術が可能であるといった多くの利点を有する。ただし, 重度変性椎間板では, UPALのみで組織再生を促進するには限界があると考えられる。今後はUPALと幹細胞を組み合わせた再生医療研究も必要であろう。

【結論】UPALを使用した椎間板組織自然再生誘導法は髓核摘出単独と比較して安全かつ有効な治療法であることが実証された。髓核摘出術後に内在性の残余髓核細胞がUPALで充填された創傷治癒部に集積し, 同様に, 術後早期に髓核前駆細胞がUPAL内へ集積, 増加することで椎間板組織が自然再生した可能性が示唆された。臨床応用を想定した場合, バイオマテリアル単体使用による椎間板再生医療は, 自家細胞移植治療に比べて多くの利点を有し, 有用な治療手段となりうることが示唆された。